ありがとうを届けたい

第8回
かながわ感動介護大賞
作 品 集

かながわ感動介護大賞実行委員会

はじめに

今年度で8回目を数える「かながわ感動介護大賞」

今年も、高齢者の方やご家族、介護職員の方々から、本当にたくさんのエピソードを寄せていただきました。

介護の仕事というと、おそらく食事や着替え、移動支援など、毎日がその連続ではないか、と思われる方が多いかと思います。

たしかに、こうした仕事は、高齢者の方の生命や生活を支えていくために、欠くことのできないものではありますが、ここだけをとらえてしまうと大変さだけが印象に残り、あまり魅力のない仕事に感じられてしまいます。

しかし、介護の仕事には、「得がたい魅力」がたくさんあります。

「良い思い出をつくることのできた時間でした」

このようなことばを、ご家族からかけられる瞬間があるということを想像できますか。

介護の仕事は、高齢者の方やご家族とともに「笑う」「泣く」、そして、新たなことを体験することによって、得られる「共感」や「感動」など、日々のかかわりの中で、一人ひとりの新たな輝きを知ることができると同時に、自分自身の成長を感じることができる仕事であるといえるのではないでしょうか。

この作品集には、介護現場の様々な場面を通じた仕事の醍醐味が満載されています。作品を通して、人としてのやさしさに触れていることを想像していただければ大変嬉しく思います。

介護に対するイメージが変わり、皆さんとともに介護の仕事が笑顔の「介護文化」として定着していくことを期待しています。

かながわ感動介護大賞　実行委員長　篠原正治

かながわ感動介護大賞実行委員会（構成団体）

社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
一般社団法人神奈川県高齢者福祉施設協議会
一般社団法人神奈川県老人保健施設協会
一般社団法人かながわ高齢者住まい連絡協議会
公益社団法人横浜市福祉事業経営者会
川崎市老人福祉施設事業協会
公益社団法人神奈川県社会福祉士会
公益社団法人神奈川県介護福祉士会
一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会
神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会
公益社団法人かながわ福祉サービス振興会
公益財団法人神奈川県老人クラブ連合会
公立大学法人神奈川県立保健福祉大学
株式会社テレビ神奈川
株式会社神奈川新聞社
横浜エフエム放送株式会社
神奈川県

かながわ感動介護大賞 表彰選考会委員名簿（○…座長）

公益社団法人神奈川県社会福祉士会　理事……雨宮　徹
一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会　副理事長……石田　貢一
神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会　会長……小林　根
神奈川県立保健福祉大学　准教授……○大島　憲子
東海大学　准教授……東　奈美
田園調布学園大学　准教授……増田いづみ

目　次

最優秀賞	餃子人生	1
優 秀 賞	母の誕生日	3
	胃ろうを閉じた母	5
	私たちにできること	7
	忘れられない眠れぬ夜	9
	ハーモニカで輝く	11
佳　　作	一人子の息子に感謝	13
	勇気をくれてありがとう	14
	幸せな花嫁	15
	笑顔の看取りありがとうございました。	16
	感謝	17
	幸せな晩年	18
	しょうぶ湯に「ほっ」とひと息	19
	ありがとうを伝えたくて	20
	介護の奥深さ、素晴らしさ	21
	いつもの会話	22
	今でも私の心に	23
	諦めない気持ち	24
	笑顔	25
	今、現在の母を想うこととは	26
	Hさん星になる	27
	爪切りが生んだ信頼関係	28
	きっかけ	29
	初物	30
第8回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評		31

※作品は、応募者の意向を尊重し、ほぼ表現を変更せず掲載しました。

※介護を受けたご本人・ご家族以外からの作品は、ご本人・ご家族からの承諾を得て掲載しています。

最優秀賞

「餃子人生」　前田 良子 様

感動介護を行った職員
特別養護老人ホーム　ひまわりユニットの職員さん達

私は餃子と共に生きてきました。

結婚して以来、夫婦二人三脚で中華料理店を経営し、毎日働いていました。店は、夫の母が開いた店で、満州仕込みの中華料理店ということで、地元では評判でした。中でも餃子はとても人気で、初めて食べた義母の餃子の味と、私がおいしそうに食べている間の義母の満足げな笑顔は忘れられません。

その後、義母の味に近づきたいと必死に頑張りました。夫の死後も一人で店を切り盛りし、朝から晩まで毎日数えきれないほどの餃子を作りました。餃子を食べた時のお客さんの笑顔に支えられて、店を続けることができましたが、歳を重ね、体力の限界もあり店を閉める日がきました。

その後施設に入り、もう私の餃子で人を笑顔にすることはできないと思っていました。

ある日、職員の方に昔の話をしました。そして本当は「いつかまた、私の作った餃子で人を笑顔にしたい」と思っていることを打ち明けました。すると職員の方が、私が餃子をふるまう機会を作ってくれました。職員の方と一緒にスーパーに買い物に行き、調理をさせていただきました。一緒に暮らす方、職員の方に、私の作った餃子を食べてもらうことができました。食べているときの皆さんの笑顔が今でも忘れられません。

餃子と共に生きてきた私の人生が、施設に入っても続けることができていることにとても感謝しています。次はもっとおいしく作ります。また、私の餃子を食べてください。

＜ 講 評 ＞

義母の餃子の味を受け継ぎ、早くにご主人に先立たれ、女手一つで子供たちを育て上げられました。一日中、餃子づくりに打ち込み、苦労も多かったことと思います。その餃子を食べたお客さんの笑顔にも支えられていたことでしょう。餃子そのものが人生を支えてくれた存在だったのでしょう。

施設に入所され、諦めていた「自慢の餃子をみんなに食べさせてあげたい」という思い。その思いを実現しようと、餃子づくりの機会を作ってくれた施設スタッフのかかわりは、ご本人を勇気づけたことと思います。餃子を作るだけのお膳立てではなく、材料の買い物から一緒に行うことで、達成感はさらに高まったことでしょう。

ご本人にとっては、施設スタッフや他のご利用者が、餃子を喜んでくれるお客さんであり、これからの施設での生活に、生きがいと希望が大きく膨らんだことでしょう。

優秀賞

「母の誕生日」　松村 恵美子 様

感動介護を行った事業所

株式会社ネクサスケア ネクサスケア伊勢原 訪問介護事業所

私はこのホスピスに来て9か月となりました。私の病気はALS、筋萎縮性側索硬化症です。体はほぼ動かず、声も出ません。普段は目の動きに反応するパソコンでコミュニケーションをとっています。ここのスタッフはとても親切で忍耐強く、その上みんなユーモアにたけていていい方ばかりです。そんな方々との話は多々あるのですが、そのうちの一つを話したいと思います。それは母の誕生日が近づいた7月のある日のことでした。私は、母にケーキとシャンパンをネットで注文しました。そこへネクサスの青木さんが、詳しい母の誕生会の詳細を聞きに来てくれました。私は普段寝たきりで話せないので、母にサプライズをするには誰かの手助けが必要でした。そして、母の誕生日当日。何も知らない母は、普段通り私のベッドの隣に座ってました。そこへ突然部屋のドアが開いてスタッフの皆さんがケーキとシャンパンと、歌えない私の代わりにハッピーバースデイを歌いながら登場してくれました。わざわざ駆けつけてくれたのは、ネクサスの寺島さんをはじめ、青木さん、鈴木さん、まさみさん、武蔵さん、ケアマネの古澤さん、みなさんからのサプライズに母は、驚いて二の句が継げませんでした。私も知らなかった歌のプレゼントに、感動しました。おかげ様で母は素敵な誕生日を送れました。スタッフの皆さんありがとうございました。

＜ 講 評 ＞

ALSという難病の松村さんは、お母様の面会をとても楽しみしていて、そしてとても感謝されています。その感謝の気持ちに誕生日にプレゼントを贈りたいが、自分ひとりでは実行することができないため、施設のスタッフに相談したところ、松村さんの思いを実現するべく協力をしてくれることになりました。

松村さん自身が、目の動きに反応するパソコンを操作し、ケーキとシャンパンを購入。当日は、普段も気持ちのある対応とユーモアで応えてくれるスタッフが、声を出せない松村さんに変わって、プレゼントとともに「ハッピーバースデイ」を歌いながら登場。お母様と松村さんにとってサプライズとなりました。松村さんの前向きな気持ちが、スタッフの素敵な演出に繋がったことと思います。

優秀賞

「胃ろうを閉じた母」　鹿江 恵美子 様

感動介護を行った事業所

社会福祉法人八寿会　特別養護老人ホームみどりの園

私の母は十数年前にうつ病を発症して後に、認知症も始まり、精神科の病院や、自宅、老健を転々とする生活になりました。次第に笑顔は見られなく、言葉少なく、オムツ、車椅子の状態となりました。

そのような時に、沢山申し込んでいた特養の中から、今、お世話になっています施設より、すぐでは無いが入所できるお話を頂きました。これで私は老健探しから解放されると、ホッとした思いでした。

施設に入所して後、一生見られないと思っていた母の笑顔が戻り、面会に行きますと元気な声で私の名前を呼んでくれます。職員の皆様がお忙しい中でも元気に明るく声掛けをし、お仕事に取り組んでいる姿にとても有難く感じています。母は担当の介護士さんが大好きで、私に優しい息子のようだと話してくれます。

そんな穏やかな日々を過ごしておりましたが、一昨年十一月に脳出血で救急搬送され七十二時間の命と宣告され最後と覚悟を決めました。十日間が過ぎ意識は戻りませんが、リハビリの病院へ転院、先生より胃ろうを勧められました。延命治療はしないと母と話していましたので悩みました。ところが「元気になる為の胃ろうですよ」との言葉に不思議な思いでした。胃ろうの状態で大好きな、施設に戻ることができました。施設の看護師さんから、少しずつでも口から食べられると楽しみが増えて元気になりますよとの言葉から始まり、職員さんのきめ細やかな支えで、スプーン半分のとろみ付飲み物から少しずつ食べさせて頂き、何と五ヶ月後には口より三食取れるようになり、面会の時には私の名前も呼んでくれます。

胃ろうの手術を受けて半年が過ぎ、交換の時期を迎え病院へ。口より食事ができることを伝えますと、先生より不安は有りますが、胃ろうを閉じますとのお言葉を頂きました。母は身をもって「元気になる為の胃ろう」、

「閉じることのできる胃ろう」を体験しました。

これは、ひとえに施設の職員さんの努力の賜物で、私は何もできませんでした。

感謝の気持ちで一杯です。本当に有難うございました。

＜ 講 評 ＞

施設から初めて連絡があったのは、育ててくれた母、元気だった母が病に伏し、懸命に介護をしながらも回復への期待を持てなくなった頃だったのでしょうか。

入所に向けた見通しの立つアプローチは娘さんをホッとさせました。そして、救急搬送後の「元気になる為の胃ろう」という力強い言葉。不思議ささえ感じたその言葉がもたらしたのは、胃ろうを閉じて再びご飯を食べられる日常生活。

お母さんの元気な声と笑顔の背景に、介護や医療の現場がお母さんにできる最善の対応をとったこと、入所の際の受け入れ、病院と施設の連携等々、きめ細やかな配慮が感じ取れます。これも、孝行娘の思いとスタッフの努力とが重なりあった賜にちがいありません。

優秀賞

「私たちにできること」

セントケア神奈川株式会社
セントケア川崎宮前　池田 求 様

お宅に伺うと、いつも笑顔で迎えてくださる娘さん。自営の仕事、まだ小学生の子供の面倒、病気がちな夫のお世話と、本当に多忙な中で10年以上、徘徊も多かった認知症の実母の介護をしていました。

日々のケアはすべて娘さんが対応。入浴は私たちの営業所が担当させて頂きました。週2回の訪問時に娘さんが、いつも私たちに言って下さる言葉がありました。それは

「皆さんと話していると本当に楽しいわ!」

それぞれのスタッフとの他愛のない会話が、日々の介護などに追われていた娘さんにとって、他では味わえない、かけがえのない時間だったようです。

でも、そんな介護生活も終わりを迎えることに。

今年2月、貸出していたシーツを受け取りに伺いました。

娘さんが弱音を吐かずに介護に頑張っている姿が、私たちの力になっていたことをお伝えすると、娘さんの目からみるみる涙が溢れ出てきました。私もこらえきれずに一緒に大泣きし、逆に気を遣われる始末。

帰り際、お母様が借りていた車イスに気づくと、「実はね、これだけはまだお返しできないの」と娘さん。「でも、こうやって皆さんと話して、一緒に泣いて、少しずつ心の整理がついてきたから、そろそろかな…」と、最後は笑顔でお別れしました。

私たちにできること。それは、何か特別なことではなく、ただただ介護者の想いに共感し、心に寄り添うこと。それが、いやそれしかできない。それができればいいのだ、と教えられました。

＜ 講 評 ＞

「寄り添う」とは何だろうか。

私自身は言葉の定義についてはよくわからないが、悩んだり苦しんだりしている人の気持ちを想像したり感じたりしながら、その人の状況に合わせてその場にふさわしい言葉を選んだり、適切な行動をとることではないだろうか。

このように解釈すれば、この作品に書かれた介護現場の家族支援は、まさに寄り添う介護の実践だったと思われる。

特に「皆さんと話していると楽しいわ」という言葉の背後に、介護福祉職の暖かい眼差しが見えてくる。何気ない会話だったとしても、それが家族を励まし、勇気づけたかもしれない。そんな寄り添いがあったからこそ、介護を終えた後のねぎらいに家族は涙で応えたのだろう。そして一緒に泣くことに。読み手の私も思わず目頭が熱くなった。

優秀賞

「忘れられない眠れぬ夜」

学校法人帝京大学
帝京大学老人保健センター　高橋 一 様

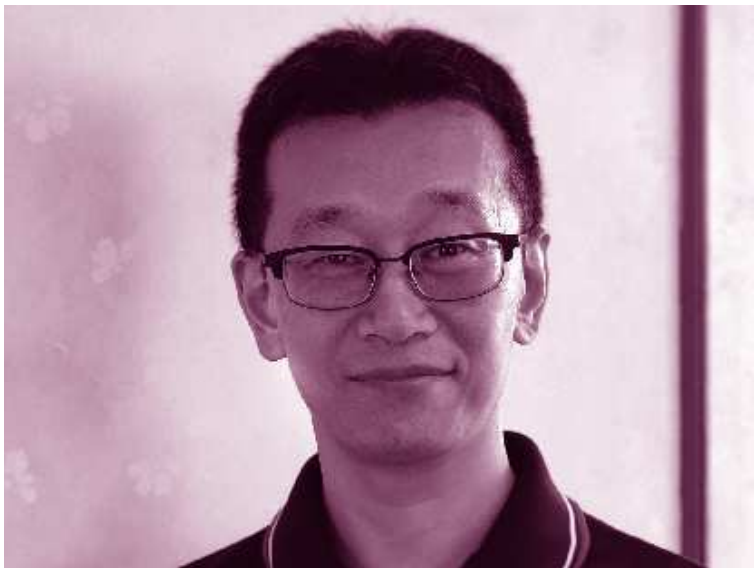
忘れたくても忘れられない一日がある。2011年3月11日、東日本大震災。打ち合わせを終えた私は、担当フロアに戻った瞬間あのとてつもない揺れに襲われた。幸い利用者の方々に怪我はなかったが、施設はほどなく停電。日が沈まぬうちに、と無理を承知で早過ぎる夕食を召し上がって頂き、あっという間に日が暮れてから22時近くに電気が復旧するまでの間、真っ暗闇の中で懐中電灯となけなしの携帯電話の灯りを頼りに過ごした。ラジオから流れるニュースで未曾有の大震災であることがわかり、私たちも大きな不安に苛まれながら。

電車通勤のスタッフの多くはその夜帰宅を諦め、私も偶然一つ空いていた多床室のベッドを一晩拝借した。とはいえ眠れる筈もなく、でもそのおかげで私はかつてない近さで聞くことができたのだ。同じ部屋で眠る、陽気でお喋りなあの人の、お調子者のあの人の、不安で泣きそうになっていたあの人の、寄せては返す小波のような、穏やかで無心な寝息を。明日も皆がこんな風に眠れるように、自分にできることをしなければ―絶望に押し潰されそうになっていた私の気を引き締めてくれたのは、間違いなくあの寝息たちであった。

あれから8年余りの歳月が流れ、私は今も此処で働いている。時には悩み、時には辛く悲しい場面もあるが、そんなとき私はいつもあの夜聞いた寝息の音を思い出す。今夜此処にいる方々が穏やかに眠れますように、と何度も何度も思いを新たにする。

＜ 講 評 ＞

2011年3月11日、東日本大震災時の被災の中で大きな不安を抱いているはずの利用者の方々が、介護スタッフのいつもと変わらぬ丁寧なケアを受け、「寄せては返す小波のような、穏やかで無心な寝息」をたて、安心して眠っていらっしゃる。その寝息に「明日も皆がこんな風に眠れるように…、絶望に押し潰されそうになっていた私の気を引き締めてくれたのは、間違いなくあの寝息たちであった」と。聴き過ごしてしまいがちな「いつもの寝息」が、震災という大きな経験の中で、寝息が聴けることがいかに幸せなことか、時には悩み、時にはつらいことのある職場の中で「介護職の心」を支えてくださる利用者の方々への感謝が綴られ、お互いの信頼から生まれる心温まるエピソードでした。



優秀賞

「ハーモニカで輝く」

社会福祉法人昴
特別養護老人ホームハートフルガーデン川和
桝谷 礼子 様

平成2年に頚髄損傷による四肢麻痺になられたTさん（80才）は、毎月一週間程度のショートステイをご利用になる。ご本人希望で居室にて過ごされ、居室から出るのは2回の入浴時のみであった。BSの野球中継を観たり、持参のCDで音楽を聴いて過ごすのがお好きで、施設のレクリエーションにお誘いしても断られていた。

ある時の担当者会議にて訪問介護事業所の方から「以前は散歩して公園でハーモニカを吹いていらっしゃった」という話が出た。他の参加者は「四肢麻痺でどうやって演奏するのか」という疑問を感じたが詳しく聞いてみると、ご家族お手製のハーモニカをマジックテープでセットするベルトを利用してとのことだった。Tさんから「昔はギターを弾いていた。」と聞いたことや、たまに口ずさむ歌が大変上手なことを思い出した私は、「歌声喫茶というイベントでピアノの伴奏でハーモニカを吹いていただくのは如何でしょう」と提案した。次回のショートステイは歌声喫茶開催日に合わせ、いよいよ当日、ご本人もめずらしくうきうきした御様子で身なりも気にされていた。Tさんがピアノの脇に案内され、演奏が始まると、その繊細な音色の素晴しさにいつしかピアノ伴奏も止まり、ボランティアの皆さんや他に参加している入居者の方々もうっとり聞き入っていらっしゃった。鳴り止まない拍手の中、普段あまり見ることのないTさんの笑顔がまぶしく感じられた。担当のケアマネージャーや御家族にもご報告し、それ以降、毎月歌声喫茶に合わせてのショートステイの御利用は継続されている。

＜ 講 評 ＞

この作品は、心温まるエピソードがつまっています。

頸髄損傷で四肢麻痺になられたTさん。ショートステイでは自室に閉じこもりがちなTさんに「なんとか楽しく過ごしてもらうには」と一生懸命に考える介護職員さん。Tさんが好きなハーモニカを吹くことができるようにお手製のベルトを作られたご家族のかた。

Tさんや皆さんの思いが、ハーモニカの音色を通して演奏を聴かれた方の心に届いたのだと思います。一人で過ごしているTさんを気にかけ、なんとかここでの生活を楽しく過ごすことができないかとTさんに関心を寄せ、思いやりを持って接している職員さん。

その人の人生に寄り添うとはこのようなことをいうのでしょう。

佳作

「一人子の息子に感謝」　安藤 フジ 様

感動介護を行った事業所
SOMPOケア株式会社　ラヴィーレ東逗子

昨年9月から12月まで入院して12月に退院がきまり自宅に帰ることにした私を一人子の息子は、お母さんを一人にはできないよ、自分の家の近くのホームに入居してくれとのことでしたが、12月22日にとにかくホームを見学に行くことになり病院からホームまでの車の中で、私はホームはいや、息子はたのむと言い合いをしながらホームに着き、ホーム長の話を聞き部屋を見て向いの山を見たとたんに「ここでもう少し生きてみようかな」という気持ちになりました。何分か前までは自宅に帰り早く主人の所に行くことばかりを考えていた私に息子は喜んでいました。その山が今、山櫻がそれはそれは見事に咲き毎日、ながめながら、やっぱり主人のことを思い出しております。主人は2年前に、20日入院して、家に帰りたいと私におがむのです。自分が建てた家で死にたいと言うので先生の反たいを押しきりつれて帰り、3ヶ月息子と2人で看病しました。最後の一ヶ月はおムツをしましたがあの最後の日を忘れません。私が右手をとり息子が左手をとり、お父さん69年間ありがとう、貴男がやさしかったので私は幸せでしたと、冷たくなるまで何回も耳元で何回も言いつづけました。息子はお父さん、お母さんのことは心配しなくてよいからね、やくそくしたとおりお母さんを大事にするからねと、私と同じように冷たくなるまで言いつづけておりました。

4ヶ月の入院も毎日通って来たように今ホームに夫婦で毎日来ては、お母さん今日も楽しかったかと、きくのです。

ここでもう少し生きてみようと思ったとおりスタッフの皆さんと、お友達のやさしさに守られて、90才の人生が又新しく動き始めたようです。なぜならこのレポートを書きたくなったのですから、神様、もう少し私に生きる喜びを頂きとうございます。

佳作

「勇気をくれてありがとう」　石塚 憲治 様

感動介護を行った職員
特別養護老人ホーム　かめユニットの職員の皆さん

平成30年2月にこの特別養護老人ホームに入苑しました。

入苑して何もわからず気持ちが塞ぎ気味だった私に、小島支援員が何気なく話し掛けてくれ、特に私の趣味等を聞いてくれ、私はカメラが好きで撮りためた写真が多数あることを話すと「苑の廊下の空いている所に飾ってもらったらどうですか」と話してくれた。

ある日、小島さんから「飾ってもらえる許可が出たよ」という知らせに感謝し、この知らせを聞いたとたん、塞ぎ込み気味だった私の気持ちがすっきり晴れて、昔のように元気になってきました。

すぐに家の中で眠っていた写真を取り寄せました。写真を掲示する際に私のプロフィール写真や必要なタイトルカードまで作成してくれて、まるで個展を開いたような気持ちにさせてくれました。おまけに展示した廊下を「石塚ロード」という名前まで付けて頂き恐縮しております。

小島さん、私に元気をくれてありがとう。私の写真を職員さんや苑の入居者や家族の人達が見てくれ、沢山声をかけてもらうようになり、私はいつしかもう一度カメラを持って写真を撮りたい気持ちになりました。小島さん、私にもう一度写真を撮ってみたいと思わせてくれてありがとう。私を元気にさせてくれてありがとう。お陰様で平成31年1月31日に特別養護老人ホームを卒業し、自宅に帰ります。寂しい思いでいっぱいですが、これからも勇気をもって頑張ります。

佳作

「幸せな花嫁」 安部 肇子 様

感動介護を行った事業所
社会福祉法人中川徳生会　特別養護老人ホームビオラ市ケ尾

齢88の母は、高度成長期に福島から横浜に嫁いだ。子を育て、父の定年で福島に戻った。祖母と父の介護をし、自身がケアハウスに入り、東日本震災を経験した。めっきり弱り、ケアハウスを追われた。なんとか入れたショートステイは終の棲家ではない。何度か娘である私の側に来ることを提案した。その度に母は荒れた。「姥捨て山に捨てようとしているんでしょ!」と叫び、時には握った拳で自らの掌を傷つけた。

そのような日、携帯が鳴った。申し込んでいた特養からだった。今度こそ。しかし、提案にまた母は荒れた。「ここで死ぬ。」と。

だめかもしれない・・・そう思いながら移転の日を迎えた。穏やかだった。見れば指にはマニュキュアが施され、薬指にはキラキラの飾りが添えられていた。スタッフの心遣いが心に沁みた。「私、お嫁に行くんだね。」と母が言う。「そうね。きれいね。」と声をかけた。

出発の時間、ホームまで見送りに来てくれたスタッフに、「今までお世話になりました。」と母は嫁に行く娘のように挨拶をし、新幹線に乗った。母の車椅子の後ろで私は号泣していた。新横浜に着くと、特養のスタッフが改札まで迎えに出てくれていた。丁寧に車椅子を車に乗せてくださった。細かく福島の施設と連絡をとってくださっていたのだ。かくして幸せな花嫁は無事に横浜に嫁いだ。母は、「今日は桜を見た。」「音楽を聴いた。」とハネムーンを満喫している。

佳作

「笑顔の看取りありがとうございました。」 飯田 章 様

感動介護を行った職員　マザーライクホールディングス株式会社
The Club+伊勢原　小林施設長、仁田ケアマネジャー、他スタッフの皆さん

2018年9月29日、21時41分、父親はとても笑顔溢れる、幸せな最期を「The Club+伊勢原」で迎えることができました。また、母親と私も最期まで、笑顔溢れる看取りをさせていただきました。

父親は最期を迎える時は自宅と言う希望がありましたが、末期の肺腺癌、8年前に脳梗塞で右片麻痺、尿道カテーテルなので、望みは叶えられませんでした。入居手続きの際、父親の家族構成、勤務先や趣味や嗜好品、生まれ育った実家などのアセスメントをケアマネから聞かれました。

亡くなる当日は朝から意識が無く、酸素マスクを付けた父親は、声掛けにも反応が無く、先生も今日が山場だと話され、夕方になると瞳孔反応も無くなりました。看護師、ヘルパーがずっと付ききりで声掛けして頂きました。「飯田さん、一緒にお酒飲もうよ。」「パチンコ行こうよ」「美女が何人もいるでしょ。」「奥さんいるけど、頬ずりするよ。」声掛けを、私は、悲しみより、微笑んでしまいました。先生から臨終を告げられると、小林施設長より「飯田さん、お気に入りの洋服ありますか?」と聞かれ「高島屋のスーツありますが」「用意できますか?」自宅に戻り用意して施設長に渡すと、「しばらくお待ちください」と言われ、20分くらいすると、居室に案内され、スーツを着た父親は、今にも生き返りそうな姿でした。

こんな素敵な看取りをして頂き、自宅以上に幸せな最期を迎えられたことに感謝いたします。

佳作

「感謝」　石渡 千鶴子 様

感動介護を行った事業所　社会福祉法人湘南福祉協会
湘南ケアセンターホームヘルプ事業所

2014年父は脳疾患性認知症・母はアルツハイマー型認知症と診断されましたが、サービスを受けず頑張っていました。

2016年父が大腸癌・心筋梗塞の手術をし、実家での夫婦での生活に不安があり、退院支援を利用。ケアマネさんにお願いし介護サービスを受けることにしました。

頑固な二人でしたので心配でしたが、徐々に皆さんの優しさに頼ることができていきました。

父は優しい反面、まじめで頑固なところがあり…最初のころでしたが、庭の枯葉が気になりヘルパーさんの作業時間に庭へ出てしまったことや、防災訓練に行かなきゃいけないと言い出したり…ヘルパーさんを困らせてしまうことも多々ありました。

夏の暑い時や・冬の寒い時の温度の変化など気にかけて頂ける安心感。父が母を怒りつけている場面には、上手に対処…私は病院の付添・日曜日に実家へ行っていましたが、ヘルパーさんが来て下さること・デイサービスに行くことで両親も私も安心した毎日を過ごせました。

あんなに他人が家に入ることを嫌がり、デイサービスになんか行かないと拒絶していたふたりでしたが、皆さんにお会いしておしゃべりすることやサービスを受けることが楽しみに変わってくれました。

2018年5月に母が蜂窩織炎で高熱を出した時も、様子がおかしいことにいち早く気付いて頂きました。ケアマネさんもすぐに様子を見に来てくれて心強かったです。

2018年7月に父が早朝玄関で転倒し大腿骨骨折で入院している間に母のアルツハイマー型認知症が進み独語がひどくなってしまい私が心折れそうな時もヘルパーさんからの母の様子の報告や優しい言葉で救われました。

父が7月に入院してからは、私は実家に夜は泊り、朝は父の病院へ、その後仕事…休みはグループホームの見学…ケアマネさんは私の不安のケアーと両親のことを第一に一緒に考えアドバイスをして下さいました。現在、両親は同じグループホームへ入所することができました。

笑って過ごすことができています。

父にもよく話し聞かせていましたが、ケアマネさん・ヘルパーさん・デイサービスの職員の方達は、みんな家族だからねと…家族でもできない優しさで…ありがとうございました。

本当に大変な時間でしたが、一人ではなかったこと、寄り添い支えて頂けたことに感謝です。

皆様にお会いできたこと、私の宝物です。

佳作

「幸せな晩年」　古谷田 和子 様

感動介護を行った職員　社会福祉法人プレマ会そよ風
そよ風3階けやきの職員さん

母はわがままな人でした。本人は気づいていなかったかもしれませんが、嫌われ者になっていました。

母は妹家族と2世帯住宅の1階で暮らしていましたが、ほぼ独居老人のような状態でした。「家族の中の孤独」という言葉を聞いたことがありますか。傍から見れば家族と一緒に暮らす老人ですが、いつも母は寂しそうでした。妹と母の間は、全ての事で対立していました。

そんな母を、親子ほど年の離れた叔父が日頃から気に留めてくれていました。ある日、叔父から連絡があり、母が歩けなくなっていると聞きました。私の心配は、そういう日がいつか来るであろうということでした。

その後何とか説得して、グループホームへの入居が決まりました。「私の家から歩いて3分だから・・・」と、説得したものの、グループホームの皆さんと仲良くできるのかしらと、次の心配もありました。

グループホームで過した9年間、母にとってはとても楽しいものだったと思います。話の合う友人もでき、私の夫の母も一緒、後から入居した私の中学時代からの親友のお母さんも一緒で、いつ行っても笑顔で冗談に花を咲かせていました。薄暗い自宅の炬燵で、テレビをつけたまま居眠りをしていた頃のうつろな眼差しはそこにはもうありませんでした。母は9年間もグループホームで楽しく過ごし、最期は職員の皆さんや妹家族、私の家族に看取られて他界しました。幸せな晩年だったと思います。

佳作

「しょうぶ湯に「ほっ」とひと息」　塚田 花菜 様

感動介護を行った職員　有限会社まごの手介護サービス
まごの手介護サービス横浜北営業所
飛田さん、渡邊さん、富田さん、森下さん、齋藤さん、西脇さん

私の夫、塚田恭一は2017年3月11日に脳内出血をおこし、8月22日まで川崎幸病院に入院しました。退院後、自宅で介護しておりましたが、訪問診療、訪問看護、訪問介護、デイサービスなど毎日のように多くの皆様に助けていただきました。特に訪問入浴は週2回（デイサービスに行けなくなってからは週3回）自宅にバスタブを持って来て、温かいお湯に入れていただきました。12月の冬至には柚子を沢山浮かべて、柚子湯に入れていただき、お風呂の大好きな夫は良い香りの中、「ほっ」とひと息を吐きました。夫は脳内出血の後遺症で言葉を話すことはできなくなっていたので、この「ほっ」とひと息が、唯一の残された言葉でした。節分には、渡邊さんが鬼の扮装で来て、楽しませてくれました。私はその日の記録ノートに「節分や　優しき鬼に　雪も溶け」と、書きました。5月5日にはこいのぼりの下、菖蒲の葉を浮かべた菖蒲湯に入れていただきました。私はまた「勝負湯に　こいものぼせる　五月晴れ」などと詠み、夫の見える所に写真とともに貼りました。

その後、肺炎などで井田病院に入院しましたが、再び退院することができ、また家で温かいお風呂に入れる日々の中2018年7月18日にあの世に旅立ちました。夫にとって、まごの手介護サービスさんのお風呂に入れたことが、脳内出血以降一番の楽しみだったと思います。

看護師さんのチェックの中、安心して入浴できたことも、家族として大変嬉しかったです。本当に有り難うございました。

佳作

「ありがとうを伝えたくて」米山　紀子 様

感動介護を行った職員　医療法人社団景翠会
介護老人保健施設こもれび　岡澤悟志さん

我が家の義母は明るく家族の太陽でした。

7年前から要介護5の義父を献身的に介護してきました。しかし、3年前から義母の様子が一変し、特に夜は不穏で玄関から転落して大腿骨を骨折してしまいました。それまで強い気持ちを貫いてきた義母は寝たきりになり、生きる望みをも失っていました。そんな時に、退院後にお世話になった老健の相談員さんとの出会いが訪れました。

強気を装う義母でしたが、この相談員さんには弱い心も見せられて、もう一度頑張りたいと思うように働きかけてくださいました。できないことばかりが増え、どんどん変わっていく自分が怖かったけれど、この相談員さんはいつも変わらずにいてくれたと、悲しい義母の心を溶かしてくださいました。今思うと、何故頑なな義母が安心できたのは、いつも変わらずに心の目で見て、心の耳で聞き、心の声で話してくださっていたのだと気づきました。必死すぎて壊れそうな家族にはできなかったことをしていただいたおかげで義母は明るい自分を取り戻し、義父と一緒に生活できています。本当に感謝しかありません。今でも義母は、嬉しいことがあると必ず相談員さんにありがとうの思いを伝えたくなり、そのためにはもっと長生きしたいと話しています。相談員さんだけでなく、多職種の職員の方々への感謝を忘れずにこれからも義両親との時間を大切に過ごしていきたいです。

佳作

「介護の奥深さ、素晴らしさ」

医療法人社団三喜会
グループホーム青葉台　加藤 富夫 様

私は介護の仕事に携わって6年目の61歳です。今のグループホームでは3年目になります。当初は、認知症の方と関わったことがなく、右も左も分からない状態でした。

初めて担当したY様。ご自身の意思を伝えることが少ない方でした。すべてのことに消極的と周囲は思っていましたが、ある日、脳の活性化に計算ドリルを勧めてみました。不自由な右手で鉛筆を持ち、計算を解いていきました。なんと満点!ご本人より私の方が感激してしまいました。

地道にコミュニケーションを続けていくと、Y様の方から少しずつ自分の好きなことなどを話して下さるようになり、やがてトイレなどデリケートな介助も任せていただけるようになりました。一日一日信頼関係が強固になるのを感じるにつれ、介護の仕事が楽しくなってきました。

認知症だからといって、何もできないと決めつけるのではなく、症状や性格などを考慮して、チャレンジしていく姿勢が大切なのだと学びました。それがご入居者の可能性を広げることにもつながると思います。

これからも、ご入居者の心に飛び込み、できることを大切に、幸せな生活を送っていただきたい。そのためには、もっと認知症や介護技術を知る必要があると、目下勉強中です。高年齢でこの仕事に携わった今、介護は奥深く、素晴らしい仕事だと実感しています。

佳作

「いつもの会話」

社会福祉法人寿幸会　介護老人福祉施設
旭ヶ丘特別養護老人ホーム　工藤 竜也 様

「おはようございます」と、いつものように挨拶を行うと、「今日はお風呂だね」と、いつものようにAさん。「そうですね」「今日はリハビリだね」「そうですね」「〇〇ちゃん（息子さん）昨日来たよ」「よかったですね」「トイレ行ってきて出たよ」「よかったですね」。毎日ほぼ決まった会話に、いつしか私はAさんの顔も見ずに、何も感情を込めずに返答するようになっていました。「今日はお風呂だね」「そうですね」「今日はリハビリだね」「そうですね」「〇〇ちゃん、今日来るかな?」「どうですかね」「トイレ行ってきて出たよ」「よかったですね」。今日も同じ会話の繰り返し…かと思ったら、その後に、「頭がおかしくなっちゃったから、こんなことしか言えなくてごめんね」と、Aさん。「!?」私は立ち止まり、何が起こったのか判らなくなりました。Aさんはしっかりと感じていたのです。感じていながらいつも必死だったのです。Aさんは頑張って、頑張って私に話しかけてくれていたのです。いつのまにか私は、この仕事に就いた時の、緊張しながらも感じた嬉しさや、共感できる楽しさを忘れかけていました。私は目を潤ませながら、「私の方こそ、気を遣わせてごめんなさい!」「教えてくれてありがとうございます!」と、感情をむき出しにして必死に伝えました。Aさんのお陰で、今日も私はあの頃の気持ちを大切に思います。「今日も息子さん、来てくれるといいですね!」

佳作

「今でも私の心に」

セントケア神奈川株式会社
セントケアホーム東戸塚　小松 清美 様

私の勤めている施設で出会ったA様は、手先がとても器用で、他のお客様の洋服のサイズ直しや繕い物をして下さるなど、日中は何かしら手作業をして過ごしている、小柄な女性の方でした。

私が夜勤の時は、スーッと居室の扉を開け「のどが渇いたからお茶ちょうだい。」と言われるのが常で、そんな時は私も時間の許す限り、お話を伺うようにしていました。

明治生まれのお母様は、会津藩の士族の出で、いつも着物を着、凛とした姿で小学校の教壇に立っていたこと。A様が幼い頃はかなりのお転婆で、いつもお母様を困らせていたことなど、懐かしそうに話して下さいました。そんな最愛のお母様が小学校低学年の時、結核で急逝。「ショックが大きすぎて、暫く言葉が出なくなったの」と辛かった胸の内を語られました。私が「母は京都にいますが、年に2回位しか帰省しないので、元気かな～」と呑気そうに話すと、「何を言っているの!親孝行できるときにしておかないと、絶対後悔するわよ!」と強い口調で言われました。ご自分の経験から発する言葉には説得力があり、私は翌日京都に帰省。次の出勤日に、久しぶりに母と会ったことをA様に報告すると、満面の笑みで、我がことのように喜んで下さいました。

私達が介護をしているお客様は、人生の大先輩です。ふとした会話の中で、大切なことを教えられることが多々あります。昨年、息子様の転勤で会津の施設に移られたA様ですが、今でも私の心に住んでいます。

佳作

「諦めない気持ち」

株式会社NGU　生活維持向上倶楽部「扉」「心」
齋藤 花世 様

私が働いている生活維持向上倶楽部「扉」「心」の保険外の活動で今年6月に高尾山登山を行いました。「もう一度、山に登りたい」とメンバーさんからの一言で実現した企画です。参加されたメンバーさんは認知症の診断がついた方々。その中でも私が特に印象に残ったMさんは86歳。当事業所でも積極的に活動して下さり、とてもインテリジェンスな方です。いざ高尾山へ!まずはリフトに乗り頂上を目指します。30分程たつと、Mさんの歩行は段々とゆっくりとなり辛そうに見えました。私は「あぁ、頂上までは無理だな」と思いました。しかし、Mさんはその後もゆっくりと愚痴も文句も言わず、周りの人達に気を使いながらも歩みを止めません。途中の険しい階段も何度も踏み外しそうになりながらも、決して諦めず3時間以上かけて頂上までたどり着いたのです。そして、参加された皆さん全員が頂上まで登り切ることができました。頂上で達成感の中で食べたおにぎりは最高でした。認知症になったら、何もできなくなるなんて言わせない。ちゃんと、意思も想いもあるんだ、と更に強く思いました。一生忘れられない思い出となりました。

一緒に参加した10歳の娘は以前から「認知症」について恐怖心がありましたが、帰宅後「ママと同じ仕事しようかなぁ」と!今までの介護現場に疑問を感じながら、やっとたどり着いた今の職場。私は胸を張って、「うん、最高の仕事だよ」と答えることができました。

佳作

「笑顔」

社会福祉法人ふるさと自然村
特別養護老人ホーム磯子自然村　佐々木 和将 様

○○さん。あなたの身近なお手伝いをさせていただいたこの7年間は僕の中では子供の頃にみつけた宝物のようです。年月がたっても色あせることなく心の中に輝きつづけています。

あなたは笑顔が素敵なおばあちゃんでしたね。僕が仕事でミスをしてしまった時もあなたの笑顔をみるだけで砂漠に遭難しオアシスを発見した時のようなうれしい気持ちになってきます。あなたが体調を悪くし熱が何日もつづいてしまっていた時は完全試合目前の9回2アウトでホームランを打たれてしまった時のような胸がはりさける想いでした。あなたは好きなことがとてもたくさんある方でしたね。俳句が好き、短歌が好き、歌が好き、百人一首が好き、テレビが好き、スポーツが好き、マラソンが好き。いつだか一緒にテレビをみている時に「私はスポーツが好きでね。あなたがオリンピックにマラソンの選手として出場した時私は手をたたいて応援したのよ。」と笑顔で話をしたのを思い出します。僕は一度も出場したことはありませんが。「今日は日曜日だから娘様がおみえになりますよ。」と言うとあなたはいつも「それはうれしいわ。早くあいたいわね。」と笑顔でこたえていましたね。

好きなことは色々とあったけれど一番好きだったのは娘様のことだってこと職員全員知っていましたよ。

少し高い所からいつまでも娘様のこと見守っていて下さい。98年間おつかれ様でした。さようなら。

佳作

「今、現在の母を想うこととは」

社会福祉法人昴
上永谷デイサービスセンターすずかけの郷
杉浦 直子 様

私は居宅でケアマネジャーをしている。認知症のあるFさん宅では、飼い犬を蹴飛ばしたり娘さんを引っ掻いたり、物を壊したりと毎月訪問するたびに何か事件が起きていたがその度、娘さんは明るく報告する。「母が怒っちゃうのは私が悪いの。(病気だと)解っていても、疲れで言葉が強くなっちゃうことがあるのよ。」母はわからないと怒るのだから、分かるように安心して過ごせるように介護者側が整えてあげれればいいというのが娘さんの考え。飲食店を経営している娘さんはお店と家を行ったり来たり。ホワイトボードに連絡事項を書いて知らせたり、危険な物は生活の中から少しずつ排除したりしていった。家族で使っている冷蔵庫の中は本人の昼食と夕食だけで、他はいつも空っぽ。生の肉でも保冷材でも全て食べようとするから。出来る限り自立を促し、その為の工夫をしていった。無くしていく記憶の中でも本人のこだわりのある物、以前の暮らしで使っていた食器や生活用品を使い、洋服も必ず本人が縫って作った服を着させていた。5年が経過し、Fさんは認知症が進行、家から出て帰れなくなることが起きて、やむなく老健に入所した。1ヶ月で娘さんのことは忘れたが、笑顔で穏やかに過ごしていると言う。それを電話で報告してくれた娘さん、とても明るい声だった。「母が楽しかったらいいの。在宅で皆さんが優しくしてくださったおかげです。」娘さんの介護は最高の認知症介護だったと思う。

佳作

「Hさん星になる」

宗教法人善了寺　還る家ともに　西川 慶子 様

12月の会議で、ご家族からターミナルという言葉が出た。歩けなくなり、食べなくなり、日々弱っていくHさん。車椅子を使用し、アイスやゼリーを介助でなんとか食べる。一時期、食事を食べるようになったり歌ったり、持ち直した時もあった。それでもだんだん痩せていき、寝ている時間も増えてきた。ご家族へ血圧や水分量を知らせるノートは、いつの日か交換日記みたいになった。久しぶりに、あんた偉いねぇって言ってくれた。やだーって言われた。散歩すると気持ち良さそうに目を細めていた。抱きしめたら照れていた。家での様子、デイでの様子が交互に書かれている。5月の末、Hさんの誕生日当日にデイの職員と、Hさんが会うたび可愛いと言って喜んでくれた5歳の娘も連れて、家に押しかけた。スヤスヤ眠るHさんを囲み、バースデーソングを歌ったりお喋りしたり。ご家族もよく受け入れて下さったと思う。その10日後、ご家族の見守る中、ご自宅でHさんは旅立たれた。娘も連れてお通夜に参列させて頂いた。娘に「来てくれたの。ありがとね。」と声をかけて下さるご家族の泣き笑いの顔がHさんと重なる。お通夜から数日後、娘と満月を見た。「お母さん、あの星の中のどれかがHさんじゃない？」もう会えないことは寂しいけれど、好きだった猫、よく歌ってくれた365歩のマーチ、日々目にする物、耳にする音、風や雨の中に今でもHさんは生きている。

佳作

「爪切りが生んだ信頼関係」

社会福祉法人聖隷福祉事業団
藤沢エデンの園二番館　比留間 晃 様

職員の中には、それぞれ何が得意、何に力を入れてケアをしているかというのがどの施設、どの職員にもあると思いますが私の場合は爪のケアです。

日頃のケアの中で、爪のケア、爪切りというと正直後回しになりがちで、気がついたらケアスタッフや看護師では対応が難しくなる。そうなると入居者様は痛い思いをすることになるということが介護に携わっている者ならば一度は経験していると思います。

爪のケアをする時はケアをして終わりではなく、時間が許す限りコミュニケーションを取るようにしています。爪のケアを通してコミュニケーションを取ることで本人だけでなく家族とも信頼関係もでき、より質の高いケアができると信じているからです。

足の爪が巻き爪や変形で立ち上がりの時や歩く時に痛みがある方に対し、普段よりもより丁寧にケアをし、それを続けたところ、徐々に本来あるべき爪の状態になり痛みも軽減することができました。家族からも「おばあちゃん、きれいになったね。○○ちゃん（孫）の結婚式の時の爪みたいになったね。」と喜んでもらい、自分自身とても感動しました。

爪のケアは日々のケアの一部であり、涙するような感動的なエピソードではないですが、立てる、歩ける、痛くないという本来あるべき姿で過ごせることがどれほど幸せなことか、今後もそのような日常が送れることを目標に、これからも取り組みたいと思います。

佳作

「きっかけ」

学校法人帝京大学
帝京大学老人保健センター　細谷 まひろ 様

私は介護老人保健施設に勤める介護士です。

私が介護士になるきっかけは、曾祖母です。曾祖母は折り紙が好きでした。時間があると昼夜問わず折り紙を折っていました。作品が完成すると見せてくれました。当時の私は、そんな曾祖母を「不思議な人」だと感じていました。彼女は認知症ではありませんでしたが、年齢相応の物忘れがあり、彼女にとって孫である私の母に「私に孫がいたのかね。」と突然涙を流したり、突然私を追いかけてきたり、時にぼけていることを感じつつ、時に私と変わらぬ姿にどこか恐れていました。

曾祖母は、私が中学二年生の頃に亡くなりました。最期は老衰し病院で過ごしていましたが、認知症を患うことなく100年の人生を全うした彼女を尊敬し、誇りに思いました。

中学三年生に上がり、進路を考えた時、曾祖母の姿が頭を過ぎりました。無性に彼女の生きた人生、生活、歴史を知りたくなりました。その後、私は福祉科高校に進学しました。曾祖母が「今」を真っ直ぐに生きていたことに気づいたのは、彼女が亡くなって2年後の冬、通所介護実習を終えた後でした。何故彼女は母をみて涙したのか、何故彼女は私を追いかけたのか。多くを語らぬ彼女の気持ちを私なりに考えて答えを見出した時私は涙を流していました。

ひいばあちゃん。私は貴方に何もできなかった。しかし、貴方のお陰で私は今、人に寄り添い、共に生きることができています。ありがとう。

佳作

「初物」

宗教法人善了寺　還る家ともに　堀江 里衣子 様

初物は東を向いて食べると寿命が75日延びる。そう教えてくれたのは昭和14年生まれの征子さんだ。賑やかな7人家族を仕切った母であり、定年退職まで企業の事務職を勤め上げたキャリアウーマンであり、還暦から水泳を習ってバタフライまで到達したというツワモノ。征子さんは現在パーキンソン病とともに生きている。華奢な躯体を歪める大きな背骨の湾曲が本来アクティブな彼女の活動を大きく制限しているようにみえる。彼女は能の演者のように美しく動き、物静かに話す。かつての聡明さはそのままに、体だけが急激に自分のものではなくなっていくような変化の中に彼女は身を置いている。そのせいか、いつもそこはかとなく愁いを帯びたように感じさせる。

そんな彼女から「初物は東を向いて…」という話を聞いたのは、おやつにスイカを食べた日のことだった。「いつもはお風呂が一番楽しみだけど、今日は皆でスイカを食べられたのが一番嬉しかった。独りで食べても美味しくないのよ。皆でワイワイ食べるから美味しいのよね。本当に今日は来てよかったわ」と、いたずらっ子のような笑顔で話してくれた。

こんな嬉しい話を聞いて黙っていられるわけがない。すぐ同僚たちに話して、次の初物も征子さんと一緒に食べたい!と伝えた。二番煎じだろうが笑い話のネタくらいにはなるだろう。征子さんと過ごす日々にささやかな喜びをもっともっと積み重ねていきたい。

第8回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評

令和最初の「かながわ感動介護大賞」への応募数は、185作品で、昨年の98作品から約2倍のご応募を頂きました。工夫に富んだ作品の数々でした。ご応募いただきました皆様、本当にありがとうございました。

今回の応募作品は、ご本人から36作品、ご家族から24作品、介護職員の方々から125作品があり、エピソードも、それぞれのお立場から「介護をとおして紡がれた心温まるエピソード」ばかりでした。

ご本人からの作品では、年齢を重ね頑張っていた仕事ができなくなるつらさ、諦め、そのような中で、介護スタッフの配慮で再び、ご本人が元気を取り戻す過程、「胃ろう」の状態であっても多くの支えがあり、諦めなければご本人の希望の「口から食べる」状態も可能であること、重い障がいの中で自分への葛藤と新たな生き方へのチャレンジ等々。

ご本人やご家族の応募作品全体が、介護職に対し「さりげない言葉の温かさ」、「自分をみてくれているという嬉しさ」など、介護の中でだからこそ感じることのできる内容で綴られておりました。

介護職員の方々からの作品では、利用者の方々やご家族との会話の中で、気づき、反省し、次につなげようとする謙虚さや、いろいろな状況の中でのジレンマ、利用者の方やご家族から仕事を通して教えられた誇りや夢をもてることへの感謝等が綴られておりました。

今回の応募作品もまた、その一作品一作品が語る言葉の重みが、今後の介護に対する温かなまなざしと流れに変えていくことを予感させるような作品ばかりでございました。

来年度も多くの皆さまのご応募をお待ちしております。

「かながわ感動介護大賞」協賛団体

神奈川福祉事業協会

一般社団法人神奈川県高齢者福祉施設協議会
一般社団法人神奈川県老人保健施設協会
公益社団法人横浜市福祉事業経営者会
川崎市老人福祉施設事業協会
社会福祉法人八寿会
社会福祉法人横浜長寿会
　特別養護老人ホーム上郷苑
社会福祉法人鎌倉静養館
社会福祉法人湘南福祉協会
社会福祉法人昴
　特別養護老人ホームすずかけの郷
社会福祉法人積善会
社会福祉法人東洋会
社会福祉法人大和清風会
　特別養護老人ホームサンホーム鶴間
合同会社Run　訪問介護Run
株式会社サロンデイ
トヨタカローラ横浜株式会社
パラマウントベッド株式会社

公益社団法人 かながわ福祉サービス振興会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉事業団
寒川ホーム
神奈川県済生会
社会福祉法人 神奈川県匡済会
社会福祉法人日本医療伝道会 衣笠病院グループ
社会福祉法人 緑樹会 RYOKUJYUKAI
一般財団法人 シニアライフ振興財団
おかげさまで ポンジュース50th －これまでも、これからも－
株式会社えひめ飲料東京工場
人と向き合い 人に寄り添う 日総ニフティ株式会社 NISSO
在宅介護サービス 若武者ケア
城南信用金庫

社会福祉法人松緑会
　松みどりホーム
社会福祉法人富士美
社会福祉法人三崎二葉会
　ケアセンター南下浦羊の家

社会福祉法人恩賜財団神奈川県同胞援護会
社会福祉法人敬心会
社会福祉法人光温会
社会福祉法人二津屋福祉会　ロゼホームつきみ野
医療法人社団相和会　渕野辺総合病院

公益財団法人神奈川県老人クラブ連合会
社会福祉法人愛川舜寿会
社会福祉法人厚木慈光会
社会福祉法人一石会
社会福祉法人永寿会　特別養護老人ホームかりん
社会福祉法人幸済会
社会福祉法人三栄会
社会福祉法人湘南愛心会　介護老人保健施設かまくら
社会福祉法人鈴保福祉会　特別養護老人ホーム柿生アルナ園
社会福祉法人竹生会　芭蕉苑　介護老人福祉施設
社会福祉法人東京武尊会　ボーナビール二本松ケアセンター
社会福祉法人藤心会　特別養護老人ホームふじの郷
社会福祉法人藤嶺会　特別養護老人ホーム弥生苑
社会福祉法人ハマノ愛生会
社会福祉法人湯河原福祉会　シーサイド湯河原
医療法人社団純正会　介護老人保健施設エスポワール和泉
株式会社アオバメディカル　あおば福祉サービス
株式会社いわしや西方医科器械
NCかわさきホームケア株式会社
株式会社ケアバンク
株式会社ひとつなぎ
東洋羽毛首都圏販売株式会社
有限会社みどりケアサービス（鎌倉市）
特定非営利活動法人愛コープ

※協賛団体一覧及びロゴは、各協賛団体の希望する方法で掲載しています。

ーご協賛いただきありがとうございますー

随時受付中!

かながわ感動介護大賞

感動介護エピソード募集

今度はあなたの「感動」介護のエピソードを
伝えてみませんか!
職員の方や感動的な場面を直接見聞きした方の
「感動」介護のエピソードも募集しています。

ご応募お待ちしております。

※詳しくは、県ホームページ
「かながわ感動介護大賞エピソード募集」をご覧ください。

※インターネットからも応募できます。

神奈川県

かながわ感動介護大賞実行委員会

福祉子どもみらい局福祉部高齢福祉課

〒231-8588横浜市中区日本大通1　TEL.045-210-4835（直通）

受賞作品の
ドキュメンタリー動画を
Webで公開しています

ともに生きる社会
かながわ憲章
KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society

instagram ID：かながわ憲章【公式】

かながわ憲章　検索

神奈川県
「認知症の人と
家族を支えるマーク」